

第七十五回滋賀県文学祭 選評

■小説部門

【選評】

知事賞「俳句県」

蜘蛛野 澄香

県名を「俳句県」に変えた豪腕知事が、今度は「母」を春の季語にすると言い出した。それを不服とした俳句部の女子高生三人は、真意を問うべく知事に手紙を出す。それに応じた知事は三人を招き、句会を開く。お題は「母」。女子高生は句づくりに呻吟する……荒唐無稽な設定で始まるドタバタ喜劇、かと思いきや、大きな破綻もなく、読者の心ぎゅつとわしづかみにして淀みなく話は展開していく。オムニバスで語られるのは、句づくりの苦労話だけではない。秘書課女性職員も含めた、四組の母娘の心温まる愛情物語なのである。

1

そして句会当日。テレビカメラと大観衆の前で、知事作を含めた五つの俳句が紹介される。クライマックスであるこの場面を、作者は主人公の回想として語る。これには読者も面食らうが、その戸惑いは読み進むにしたがい氷解し、回想でしか語れない結末に、読者は感動し心地よい余韻に浸る。計算された見事な構成。俳句を素材にした斬新さは言うに及ばず、作中に登場する一句一句が、話の進行と実にうまくリンクしている。新しい才能の出現に歓喜。知事賞の名にふさわしい傑作である。

■随筆部門

【選評】

知事賞 実家のあとさき

山田 静子

弟が亡くなり、実家を手放さざるを得なくなった作者。すぐに買い手は決まったものの、多くの思い出や手放す寂しさ、家じまいの大変さなどの思いが複雑に交錯する。さらに周囲の人々の思いまで緬い交ぜながら、丁寧を描いている。

古来の工法の家に魅了され、すぐさま買うことに決めた新住人は、きっと大切に住んでくれることであろう。

家じまいや空家バンクなど昨今あちこちでよく目にする光景ではあるが、一軒の家には住んでいた人の歴史があり、重みがある。そのことをしみじみと深く感じさせられる作品である。

■詩部門

【選評】

知事賞 「スズメノカタビラ」

佐藤 アイ

会社組織や社会集団になじむことができない人間の悲痛な叫びを、臨場感あふれる筆致で描いている。周囲に「溺れそう」で「抗え」ない。こういうマイナーな弱者に思いを致せない連中は、枯草だらけの中でも緑を失わないスズメノカタビラはかえって目に触るのであろう。そんなことまで思わされた。作者は、感受性が鋭いあまりうまく世を渡ってゆくことのできない人の背中に手を置く人に焦点を当てていることは言うまでもない。

■作詞部門

【選評】

知事賞 「遙かな街まで」

叶 葉湖

課題曲に作詞してくださった作品は今年も何点かありました。課題曲、自由題合わせて選考した中で、一番まとまっているという点で、選ばせていただきました。『飛行機雲追い越し』のフレーズが作者の逸る^{はや}気持ちを代弁しているようで、この表現は選者三人評価いたしました。ただ、曲の中でサビのところにつける言葉が『ああ』という単純なものでなく、もう一考されるとよかったのでは、と感じます。あと、全体的にもうひと押し作者の気持ちを書かれると、もっと良くなったのでは、と思いますし、二番で終わっているのも非常に惜しいと感じます。

■短歌部門

【選評】

知事賞

松山 武

午前二時幻視幻聴騒ぐ妻に介護の覚悟揺らぐ一瞬

まず歌の内容に胸を打たれる。最後まで傍にいて介護しようと決意された作者ではあるが「午前二時幻視幻聴騒ぐ妻」という状況に平静では居られなくなった。その事態の重さを漢字を多用することによって読者にも伝えようとしているのではないだろうか。「揺らぐ一瞬」が何とも切ない。

■俳句部門

【選評】

知事賞

吉田 邦子

勾玉のような補聴器小鳥くる

人は皆老いる。それは解っていても、もの悲しい気分となるものです。補聴器を買うのも使うのも、なかなか前向きの気分になりません。その補聴器を古代の装飾、祭祀用の勾玉ととらえたところが斬新で粹です。補聴器を科学の恩恵としてありがたく使わせてもらいましょう。さわやかな気分の季語、小鳥くるとの取り合わせも良く佳句となっています。

■川柳部門 題「駅」

【選評】

知事賞

中島 順子

ひと駅ひと駅わたしになりました

この「駅」は過去のさまざまな出来事の喻えかもしれない。その経験が私を作ったというのだろうか。定型ではないが無造作に書かれた破調ではなく静かな詠嘆を感じる。

■冠句部門 題「足任せ」「疎に密に」「灯を数え」

【選評】

知事賞

北村 嘉浩

足任せ 野心も涸れた身軽さよ

退職後の今、伸び伸びと暮らしておられる様子が窺える。「野心も涸れた」の言葉より管理職で頑張って来られた自負も読み取れる。今しばらくは、自分のためにだけ暮らしてよいのだと散歩する歩も軽く気分がいい。爽やかな句となった。